中谷宇吉郎雪の科学館開館２０周年記念式典に参加して

山本　健吉

平成２６年１１月１日（土）午前１０時３０分から石川県加賀市片山津地区会館において、中谷宇吉郎雪の科学館開館２０周年の記念式典に参加させていただきました。

オープニングでは、アルバート・ロトと三代子ご夫妻のピアノ演奏があり快い気持ちで式典が始まりました。

宮元陸市長様の式辞、樋口敬二様の祝辞があり、雪の科学館友の会も表彰されました。

続いて「宇吉郎と寅彦」という演題で池内了名古屋大学名誉教授の講演がありました。

講話では、宇吉郎と寅彦の出会いや寅彦の宇吉郎への言葉、宇吉郎の言葉などが紹介されました。一部を報告します。

寅彦の宇吉郎への言葉として、１９３０年、北大への赴任の時に「君、新しい処へ行っても、研究費が足りないから研究が出来ないということと、雑用が多くて仕事が出来ないということは決して云わないようにし給え」「それから時々に根に肥料をやることを忘れないで」１９１２年球皮事件「ねえ君、不思議だと思いませんか」「僕の所の仕事はどれだけだって１０年は進んでいるつもりさ」と、そして、宇吉郎の言葉として「研究というものはこういうものと初めから思い込んで、唯面白いという念だけに駆られて、実験に打ち込んでいた。そういう意味で先生の研究指導ぶりは、天衣無縫の極に達していたと言えよう」「雪の結晶は、天から送られた手紙であるということができる。そしてその中の文言は結晶の形及び模様をいう暗号で書かれているのである。その暗号を読み解く仕事が即ち人工雪の研究である」など数々を紹介していただきましした。

その後、場所を雪の科学館に移してレセプショ

ンが冬の華（軽食場）で行われ、私も寺田寅彦記念館友の会の会長として紹介していただけました。

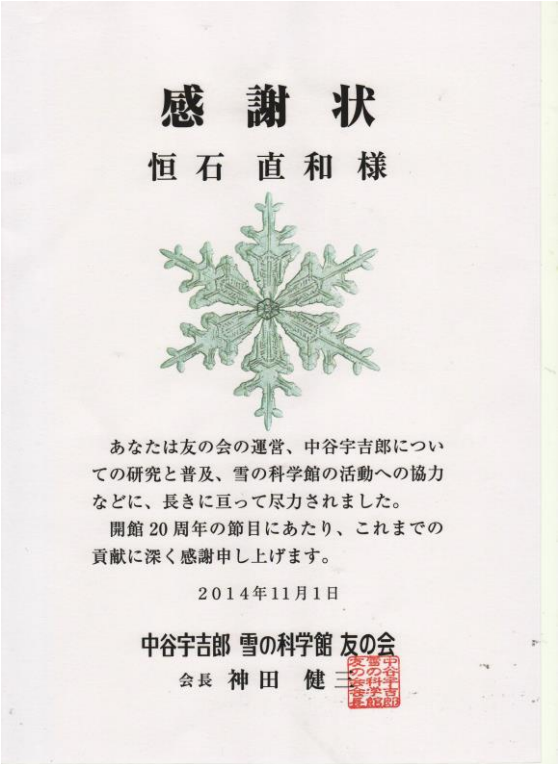
続いて、映像ホールで前館長の神田健三様から「中谷宇吉郎雪の科学館の２０年」と題してギャラリートークが行われました。

中でも、開館して依頼、入館者が減少し、生誕１００年の２０００年にも入館者が減少ことを受けて、入館者に満足していただけ科学館への模索が始まったということ。そして、ダイヤモンドダストや氷のペンダント、過冷却、ムライ式人工雪など雪氷の体験コーナーの充実などに努め、入館者の減少を止めることができたことなどご苦労が多かったことなどを話されました。さらに、展示物の充実や企画展、さらに子ども雪博士教室や雪の文化とデザイン賞などにも取り組まれ、現在では恒例の行事にまで発展されてきたことなどを感慨深げに説明をしてくださいました。

最後に「２０年！ご協力下さった沢山の方々に感謝します。ありがとうございました。」と締めくくられ、感無量の様子を見せておられました。本当にご苦労様でしたと言わせてもらいました。

一方、中谷宇吉郎雪の科学館友の会は、別室にて会を開き、感謝状を贈呈されていました。

贈呈された方の中に、寺田寅彦記念館友の会の顧問の恒石直和様をはじめ、大森一彦・山田功・四宮義正・佐藤邦夫・山根木暎子様各位に感謝状が贈呈されております。



感　謝　状

恒石　直和　様

あなたは友の会の運営、中谷宇吉郎についての研究と普及、雪の科学館の活動への協力などに、長きに亘って尽力されました。

開館20周年の節目にあたり、これまでの貢献に深く感謝申し上げます。

2014年11月1日

中谷宇吉郎 雪の科学館 友の会

会長 神田　健三

この記念行事期間の１日のみの参加でしたが、増々寺田寅彦と中谷宇吉郎が強い絆で結ばれていることを直に感じ、寅彦と宇吉郎の二人が過ごした時とはいかないまでも二つの友の会が緊密な連絡を取り合い、活発な活動をしていきたいものと思ったことでした。